

---

# 始まりの夏休み

クルクルココロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

始まりの夏休み

### 【Nコード】

N4514U

### 【作者名】

クルクルココロ

### 【あらすじ】

行くあてもなく外に出たユウタ。

ユウタは駅でサエに出会う。

そして二人は大きな国立公園に向かった……。

**(前書き)**

是非、縦書きにして読んでみてください。

今日はこのＴシャツとジーンズ。僕のお気に入りだ。Ｔシャツの前面には大きな星マークが描かれている。

着替え終わった僕は鏡の前に立って、今日の僕が選んだ服装に違和感がないかどうか確かめた。上はＴシャツ、下はジーンズ。この格好で違和感など出せる人などいるのだろうか。もしいるのだとしたら、それは相当な衣服オンチだろう。僕は鏡の前で少し回ったりしながらそんなことを考えた。うん、違和感はない。誰が見ても僕はＴシャツとジーンズを着た一人の青年だ。

僕は玄関の戸を開け外に出た。出てみたはいいものの特に行きたい場所がない。仕方なく僕は駅に向かうことにした。電車に乗ってどこか遠くに行ってみよう。

駅に到着した僕は閉口した。財布を家に忘れてきてしまったのだ。なんとということだ。一文無しとは今の僕の状況を言うのだろうか。僕は途端に遠くへ行く気を失ってしまった。

しばらく駅前のベンチで座って携帯電話をいじっていると一人の女の子に話しかけられた。

「ユウタくんだよな？」

高校時代のクラスメイトである高崎サエがそこに立っていた。

「まさかこんなところで出会うなんて。……………なーんて言うと思った？」

サエはそう言って笑い出した。それもそうだ。サエと僕はご近所同士なのだ。僕が高校生だったときは、一時期彼女と一緒に登校していたこともある。

「今日はどこかへ行く予定でもあったのかしら。そのＴシャツ、ユウタのお気に入りでしょ」

サエはそう言って僕のＴシャツに描かれている大きな星を指差した。

「別にそこまでこのＴシャツが好きじゃあないよ」

「ウソだー。ユウタ、私と出かけるとき大抵そのＴシャツだったじゃない」

「同じような柄のＴシャツをたくさん持っているんだよ」

僕はそう言っただけでサエから視線を外した。遠くからセミの泣き声が聞こえる。もう夏が来たのか。いつの間に夏はやって来たのだ。いつ春は行ってしまったのだ。僕は別れの台詞を一度だって聞いていないぞ、全く。季節とは自分勝手なやつだ。

僕は何故かサエと一緒に公園に行くことになった。公園といっても不良たちがたむろするようなあの小さな公園ではない。国によって計画的に造られたとてつもなく大きな公園である。その公園の周りを一周回ろうものならフルマラソン以上の距離を走らなければならぬ。僕とサエはその公園に向かっている。僕が公園に行くのに同意した理由は特にない。強いて理由をつけるとするならば、そのほかに選択肢がなかったからということになるだろう。

僕とサエは公園に到着した。

「ユウタ、今度会ったら絶対に今日貸したお金返してよ」

そんなことを言うのなら初めから貸さなければいいのにと僕は思った。サエは公園の中心部を目指して歩き出した。僕も遅れずにサエの隣を歩く。

公園の広場では、何組かカップルが芝生の上に座って日向ぼっこを楽しんでいた。セミの泣き声が至る所から聞こえてくる。それにしても開放感のある大きな広場だ。

「私、走ろうかな。なんだか走りたくなってきた」

サエはそう言って屈伸を始めた。彼女は高校時代、陸上部に所属していて長距離を専門にしていた選手だった。

「財布と携帯電話、ここに置いとくから見てて。見るっていうのは見張るという意味よ。ただ見ておくという意味じゃないからね」

誰がこんなときにそんなとんちの利いた行動を取るといふのか。

大体、今僕にはそのようなおふざけをするだけの元気がない。彼女

は伸脚を終えると走り出す構えをとった。

「ねえ、早く言ってよ」

「何を」

「スタートの合図よ。ノリが悪いわね」

彼女はそう言ってもう一度前を向き直した。

「よいい、ドン」

僕の合図と同時に彼女は右足で芝を思い切り蹴った。すかさず彼女は左足で地面を力強く蹴る。彼女の体が一瞬間に浮く。右足、左足、右足、左足……彼女は躍動を続ける。

あつという間に彼女は広場の向こう岸に着いてしまった。

「ユウター！早くおいでよ！走ると気持ちいいよ！」

僕は手に持っていたサエの財布と携帯電話をポケットに入れ、前かがみになって右手と左手を芝につけた。僕は左足が後ろで右足が前。これが僕のスタートの構え。いつもは足を支えるスタート台があったのだが今はない。あるのは不揃いな芝だけ。右手の上を見てみると黒い小さな蟻が小指の上を歩いていた。

「ユウター！高校時代の走りを見せてよ！中途半端な走りしたらやり直しだからね！」

彼女までは約百メートルぐらいだろうか。ふふ、面白い。久々に走りたくなってきた。だが、果たして僕の体は動いてくれるのだろうか。

「準備はいい？位置について、よいい……」

セミの泣き声が公園中を包み込む。僕は全身の力を抜き、音と体を同化させた。僕はセミだ。合図と共に大きく羽を広げ大空に飛び立つセミなのだ。

「……」

僕は目を閉じ、心を静めた。

「ドン！」

思い切り左足で芝を蹴る。続いて右足。さらに左足。右足、左足、右足、左足、右足、左足。そう、このリズムだ。これこそが僕のリ

ズム、僕の鼓動だ。走れる。僕は走れる。さあ、芝生たちよ、僕をもっと高く、もっと大きく羽ばたかせてくれ。

ふと前を見るとサエが満面の笑みを浮かべながら、両手を高くかかげ上げ、左右に大きくはためかせていた。

「ユウタすごい！まるでほんとに飛んでるみたい！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4514u/>

---

始まりの夏休み

2011年7月14日03時27分発行